

A-Lab Artist Talk

出演 コーディネーター：おかげんた（タレント（吉本興業株式会社所属）
アートプランナー、A-Lab アドバイザー）、河原雪花、鈴木大晴、藤本純輝、
茂木山スワン、山下茜里
日時 令和3年5月30日(日) 15時～17時
場所 あまらぶアートラボ「A-Lab Room1」



トークイベントの様子

おかげんたさん（以下：おか） おかげんたです。よろしくお願い致します。みなさんいかがお過ごでいらっしゃるか。今ちょうど私の後ろにアーティストさんがいらっしゃるんですけども、これからお一人ずつ作品やご自身のこと、アトリエ、ターニングポイントをお聞きしていきたいと思います。それでは早速アーティストの方々にお話をうかがいます。最初は河原雪花さんです。よろしくお願いします。

河原雪花さん（以下：河原）：河原雪花です。よろしくお願いします。

おか：それでは河原雪花さん、まず学校のことからお聞きしていきたいと思います。どちらの大学でしょうか？

河原：京都市立芸術大学です。

おか：こちらのお写真は？

河原：大学ですね。

おか：きれいですね。

河原：これは池なんんですけど、池の中に埴輪が2体立っています。

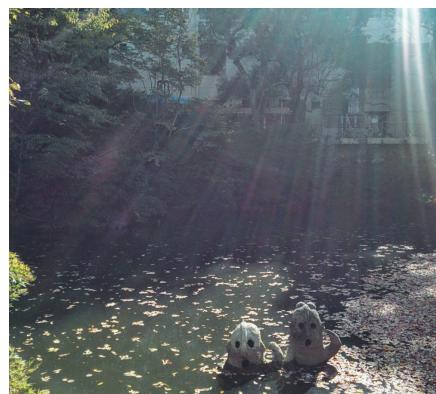
おか：この埴輪はなんですか？

河原：埴輪の1体は藤浩志さんという方の作品です。

おか：藤浩志さんの作品なんですね。

河原：はい。だいぶ前に作られたもので。横の埴輪は私が1回生時に課題の流れで作った偽埴輪なんですか

ど、今は2体池の中に沈んでいて、忘れ去られています。
おか：えっ？ 藤浩志さんの横にそういう風に作品を学生さんが展示して大丈夫なんですか？
河原：課題の流れから結果こうなってしまった感じです。
おか：ちなみに藤浩志さんの作品とかはご存知ですか？
河原：いや、その時は誰も知らなくて。
おか：実は、藤浩志さんご自身からこのお話を伺ったことがあって。多分誰も知らないと思いますと、ご本人もおっしゃっていましたからね。こういう発想はどういうところから出てきたんですか？
河原：1回生の時に企画プロデュースをする課題が出さ



れて、グループで埴輪をシンボルにしようみたいな企画から始まりました。まずシンボルにするにはどうしたらいいかというところから、当時1回生の発想力をフルに使った結果、その2体目の埴輪を作ったんですけど、元の1体目を壊して2体目と替えるかというような話をしていました。

おか：あらま。

河原：でも藤浩志さんが作ったことが発覚して、壊すのはまずいなって。

おか：そらあかんわ。

河原：それから昔池の中に立っていたことを知って、それなら池の中に2体一緒に入れて……と、いろいろな流れがあって最後にこうなりましたが、芸祭の時に池の中に入った学生が沈めたまま、誰も見つけられなくなってしまって。京芸はもうすぐ移転するんですけど、そのまま埴輪も忘れ去られて行くのかなと思います。

留学

河原：実は私大学にあまり行ていなくて。

おか：大学に行ってない？ コロナの影響ですか？

河原：そうですね、後半はコロナの影響と、あと留学もしていたので。院の時はもうほんとに半年……。

おか：どちらに留学していたんですか？

河原：ポーランドに行っていました。

おか：それはアート、芸術の勉強で行ったんですか？

河原：そうです。大学の交換留学ですね。

おか：京芸とポーランドの大学に違いはありましたか？

河原：一番は授業形態ですかね。京芸は専攻に分かれてその先生と相談して作るんですけど、その相談も学期につき2回ぐらい先生と面談するぐらいで、1週間に1回セミがあるっていう感じですね。

おか：1週間に1回？ あとはどうしているんですか？

河原：家で制作していました。逆にポーランドはすごく手厚くて、毎週色々な先生と相談させてもらっていました。

おか：まったく形態が違うわけですね。

河原：そうですね。

おか：自分にはどっちが合っていました？

河原：どっちも好きでしたけど、やっぱり人と話すこと

が好きなので、もっといっぱい大学に行きたかったという気持ちはありますね。でも京芸時代は長かったから、積もり積もって色々ありましたけれど。

おか：ポーランドの学生さんの作品のクオリティはどうですか？

河原：英語で授業を受けられる大学だったので、色んな国の人たちがいて、作品も色々あってすごくおもしろかったです。

おか：色々な経験を経て作品が生まれてきたんですね。それではその作品のご紹介をよろしくお願いします。

河原：これは私が今回 A-Lab で展示している「青い城」という映画なんですけど、映画と一緒に背景画やパネルとかその空間を作ったインスタレーションの画像です。

おか：私も拝見させて頂きましたが、非常にロマンティックな印象でした。映画はどういった内容ですか？

河原：ポーランドに留学し始めた時から作り始めたのですが、「フルシャワの人魚伝説」というポーランドのおとぎ話がありまして、その人魚伝説と「青い城」というルーシー・モード・モンゴメリが書いた小説があって、その2つの物語とさらに自分の关心があった女性の問題をパズルのように組み合わせて物語を作りました。手法は切り絵アニメーションという、ロシアとか中東欧とかの昔の共産主義時代の時にすごく発展していたアニメーション文化から影響を受けて、切り絵アニメーションを使っています。

おか：これは紙に水彩ですね。

河原：はい。水彩画です。

おか：自分が見てきた場所、記憶から紡いでいったというか……。今回のインスタレーションは、あまり日本の香りがないというか、独特のある種おとぎ話の世界、部屋に足を踏み入れた途端に異空間が存在するような感じがしました。そして河原さん自身もそのままのイメージのアーティストさんだと思います。だから全然違和感がないですね。アーティストさんからはっきり作品が滲み出ているというのもなかなか珍しいのかなという気がします。制作にはどれくらいの時間を要したんですか？

河原：これは1年半かかりました。

おか：あのインスタレーションも含めてですよね。

河原：そうですね。

おか：発表は卒展で発表されたんですか？

河原：そうです。そこで初めて発表しました。

おか：周りからはどうな感想がありましたか？

河原：何回も観たって言ってくれる人が結構いました。

私は一番好きな映画はもう何回も観ているんですけど、

映像作品を何回も観るって結構難しいことで、そうさせ

ることって難しいことだなって思うので、やっぱりすご

く嬉しかったです。自分の映画の中で疑問に持っていた

ことを考えながら作っていたんですけど、人に観てもら

うと色んな角度からたくさん的人が感想を言ってくれる

ので、あっ、それはこういうことだったのか、という気

づきがいっぱいあって、それが一番良かったですね。

おか：作品から受ける、自分自身では気づかなかつたこ

とを観ていただいた方が気付いて色々話してくれて、

これからの作品の糧になりますよね。

河原：そうですね。

おか：A-Labの話を聞いた時はどうでしたか？

河原：卒展が終わってから何も予定が無く、これからど

うしようかなと思っていたところでした。またもう一度

展示をさせてもらえて、色んな人がまた見てくださる機

会がすぐにいただけたことが一番嬉しかったです。

おか：そう言つていただけると、我々も嬉しい限りです。

河原さんありがとうございました。

河原：ありがとうございました。

おか：次は鈴木大晴さんです。ガラッと雰囲気が変わ

りますね。どちらの大学でしょうか？

鈴木大晴さん（以下：鈴木）：京都精華大学に行ってい

ました。

おか：京都精華大学ですね。私、実は客員教授をさせて

いただいておりまして、作品も拝見いたしました。まづ

は大学の画像ですが、ものすごい雑然としていますね、

これは何ですか？

鈴木：学祭の実行委員をやっていたので、5日間ぐら

泊まり込みずっと準備していました。僕は写つていな

いですけどその時の教室の写真です。

おか：ちょっと待ってください。これ人いますか？

鈴木：ここでみんな寝ていました。5人くらいいます。



おか：一種の現場ですね。すごいなあ。これは学祭に使
うものとかがここにあるわけですね。

鈴木：あとはみんなの荷物とか服とか。忙しかったから
ぐちゃぐちゃになっている状態ですね。

おか：これは何時ごろですか？

鈴木：多分朝の3時ぐらいです。

おか：最後は何時ぐらいまでやっていたんですか？

鈴木：5日間ぐらいいは、みんな1日2時間くらいしか寝
てなかつたですね。

おか：まだ若いからできることですよね。

鈴木：若いからできたかも知れませんね。

織の姿

おか：統いての写真お願いします。これは？

鈴木：僕が織をしている時の後ろ姿です。

おか：すごい大きな作品じゃないですか。手がけている
作品は今回の？

鈴木：そうですね。ロビーで展示している作品を作つ
ているときの様子です。

おか：織機もめちゃくちゃ大きいですね。

鈴木：すごい大きいです。



おか：ちなみにこれで完成までどれくらいの時間がかかる
んですか？

鈴木：丸一ヶ月ぐらいはかかります。

おか：そうすると糸の量もその分かなりの量を使つてい
るということですか？

鈴木：すごく使いますね。

おか：何kgぐらい使うんですか？

鈴木：7kgぐらい使います。

おか：7kg！？すごいですね。展示する時も作品自体
重くなりりますよね。作品は拝見しましたけど非常にカラ
フルで何色も使われていますよね。大学を卒業したらな
かなかこういう大きな設備では制作できない問題がある
から、大変ではないですか？

鈴木：そうですね、今は自宅に織機を置いています。

おか：どれくらいの大きさの？

鈴木：大学の織機が横幅2mですけど、僕の家にあるの
が150cmですね。

おか：結構大きなものを持っていますね。

鈴木：部屋がほとんど埋まるぐらいの大きさです。

おか：それが自動的に自分の作品のサイズになりますも
んね。ちなみにテキスタイルを卒業した人たちは、みな
さん家に織機を持っているんですか？

鈴木：かなり少ないんですけど、何人かいますね。

おか：本気度が伝わってきますね。統いての写真をお願
いします。これが今回展示している作品ですね。さっき
織っていたものがこうなつたってことですか？

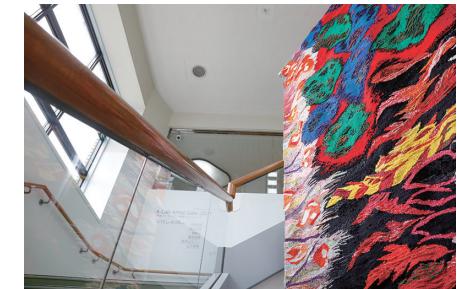
鈴木：そうですね。

おか：すごく密というか、いろんな色が混ざっている形
ですね。上の方は赤や緑があって、何を表現しているん
でしょう？

鈴木：2020年の7月ごろに作った作品で、コロナウ
イルスをモチーフにしました。上の溜まっている丸い部分
がコロナウイルスをイメージしています。当時大学に
ほとんど入れない状態で、制作がほとんど止まつてしまつ
て。すごい心が病んでいたというか、めちゃ怒って
いたんですよ。

おか：怒っていた？

鈴木：なんでやねんみたいな。そういう気持ちや、本当



に死んでしまうかもしれないみたいなことを思つて、作
りました。

おか：僕がちょうど卒展を拝見した時には、版画も勉強
されていましたよね。なぜ勉強されたのですか？

鈴木：僕はテキスタイルを専攻していたんですけど、大
学のゼミが他のコースも専攻できることになっていて、
版画を扱つてみたかったので作らせてもらいました。

おか：織の仕事にもプラスになることはありましたか？

鈴木：ちゃんと版をつくつて彫る版画ではなく、版に直
接画材をのせて、瞬発的に描く手法をやっていました。
それが線の動きとか瞬発的に色を選ぶということとして
織にも反映されました。

おか：そこから作品が変わってたりしているのだと思
うのですが、僕はこのようなテキスタイルの荒々しい作
品というのはあまり見たことなかったので、非常に斬新
な印象がありました。下の（エントランス展示）ような、
大作が多いじゃないですか。「なんでやねん」と思うと
ころが大作を作る方向性に反映された感じですか？

鈴木：そうですね。どうせなら一生残るものというか、
捨てられないものを作りたいなって思つていたので。大
きすぎるの、捨てるに捨てられないかなって。

おか：保管するのも大変ですよね。2階の受付前のロビー
にも作品が展示されています。これは3部作ですか？

鈴木：ばらばらですね。これまでの展示ではほとんど、
織の裏地というのを見せることができなくて、今日はそ
ういう部分も。テキスタイルの世界では、裏地を見せる
ことがNGなところもあるんです。

おか：ダメなんですか？

鈴木：裏に布を貼つて隠したりします。



おか：どういう理由で見せないのでしょう？

鈴木：織をやっている人は、織の裏地は糸が出ていて汚いと思う人が多いらしいです。僕はあまりそうだとは思わない。すごく面白いなと思っているので。

おか：制作するときにそれは意識してやるんですか？

鈴木：それは全く意識しないでやりますね。

おか：意識しないで制作して、今見せていただいているような形の作品にでき上がっているということですね。

鈴木：そうですね。

おか：確かに面白いですよね。表裏一体、一つの作品として見て頂きたいという。卒展で学長賞をお取りになられましたが、嬉しかったですか？

鈴木：すごくびっくりしました。

おか：学長から何かお言葉はありましたか？

鈴木：初めて見にきてくださった時にたくさん喋ったら、すごい共感していただけました。

おか：やっぱり学長賞を貰ったら自信つくわね。

鈴木：いや、あんまり何も変わらなかったです。

おか：そのあと京都で個展も開催されましたよね。僕も拝見しました。

鈴木：思っていたより人が来てくれました。でも学長賞取ったのは結構影響があったのかもしれないですね。

おか：それも糧になって、これからテキスタイル、版画でアーティストとしてやっていこうという姿勢が個展時に見受けられるところがあって、すごく勇気づけられました。A-Labの話が来た時はどうでしたか？

鈴木：京都以外で展示してみたいと思っていたので、それで尼崎で展示できるのがすごく嬉しかったです。

おか：大学や院を修了しているメンバーと一緒に展示するのは刺激がありますか？

鈴木：すごく刺激ありますね。

おか：今回は、エントランスと、階段を上がっててきたロビーにも作品があるという、位置的に絶対にみんなの目に入る場所ですからね。

鈴木：そうですね。空中に吊るすっていうのは、やってみたかったので。

おか：大学の時やギャラリーでは下に敷いていたけど、空間に吊るす展示はなかったんですね。

鈴木：天井はそこまで高いところは滅多にないので、せっかくやつたらやりたかったので、階段上がりながら作品見れるってすごい面白いな。

おか：撮影するのにもすごく面白い。裏も見れるし、吊っているから上の部分も見える。卒業して初めての見せ方、展示の仕方がA-Labで一つ経験できたっていうことはありますよね。貴重なお話を聞きました。ありがとうございました。

おか：続いて、藤本純輝さんです。

藤本純輝さん（以下：藤本）：お願いします。

おか：藤本さんの作品は、今年だけで多分5～6力所で見ています。今年は何作品ぐらい作っていますか？

藤本：もう数えてないですね。実は学部生のときから、制作のベースに関してはそんな感じです。

おか：大学はどうでしたか？

藤本：僕は京都芸術大学です。

おか：これは作品ですか？

藤本：これは僕が使っていたアトリエの写真になります。

おか：みなさんが使っていたということですか？

藤本：そうです。この部屋は大学院の部屋で、ちょっと広いですね。

おか：院生の方々っていうのは基本的に学部の時より人数は少ないですよね。何人ぐらいでお使いになっていたんですか？

藤本：この部屋は手前が僕で、奥に2人でした。奥の部屋も手前の区画？と同じぐらいの大きさです。

おか：かなり広いですね。

藤本：そうですね。広く使わせていただいていました。

おか：大学院って大体こういう感じなんですか？

藤本：僕は他のところを見に行ったことがないので、ど



おか：いかわからないんですけど、僕が勝手にこの部屋を展示もしてみようと思って使っていました。みんないろんな使い方をしていますね。

おか：院生の1回生の時から2回生の時までの作品がここにあるということですか？

藤本：人によりけりですね。僕はこの時期のものだけしか、この画像の中にはないです。

おか：この時期のものといっても、結構ありますよね。

藤本：そうなんです。全部1ヶ月以内ぐらいの作品なので、今と変わらない作り方をしています。

おか：正面に縦長の作品もありますね。院の時に全部作ったものを展示して、しかしどこかで展覧会があるからということで作っていたものではないんですね。

藤本：そういうことです。研究もあるし、制作の過程もあります。自分の求めているものをひたすら出すので、量が増えていく感じです。

おか：院に行っている時に、作品に関して追求していくわけですね。2年間の意味はありましたか？

藤本：すごくありました。

おか：それは没頭するということなのか、それとも例えば他の院生の方々と切磋琢磨していくことですか？

藤本：どちらもあります。やっぱり学部じゃなくて院は1つのことに専念して研究できるし、同じように研究している人たちが周りにいることで、みんな切磋琢磨していくので。

おか：その研究があって、コンセプトがあったりとか、これから構築していくという1つの通過地点ですか？

藤本：通過地点です。

おか：いろんな場所で作品展示をしてたくさん的人が観ていると思いますが、本人としては嬉しいですか？

藤本：僕も作品を見てもらいたくていろんなところで展示をしたいなと思っているので。

おか：やっぱり作品はいろんなところで展示することによって、ここはこういう感じならこの作品が生きるなんか、やっぱりそういったことを考えるんですか？

藤本：すごく考えますね。

和室

おか：今回のA-Labでの展示は和室ですが、どういった展示をするのかなと思ってすごくワクワクしました。展示の様子を見てみましょう。展示がしっくりきすぎていていうか、本当に雰囲気が、展示室という感じですね。今回和室で展示してどうでしたか？



藤本：もともと和室は、作品が合う気がしていたので、いつか絶対展示してみたいと思っていたんですが、機会がなかったです。

おか：この和室を見てどうでしたか？

藤本：もう是非、という気持ちで。この和室なら絶対僕は自分のシリーズの中のこの作品を持ってきてみたいと思って制作しました。

おか：この和室にこの作品を選んだことに何か意味があるですか？

藤本：意味としては、空間に合うか合わないかですね。

おか：もう一つ作品が展示されていますよね。

藤本：そうですね、奥のところに小さい作品が。

おか：この小さな作品は、2点で一つの作品になっていますね。すごくこだわっているような気がしますが、例えばキャンバス地などにこだわっていますか？



藤本：こだわっています。

おか：どういった理由で選んだりされているんですか？

藤本：僕は空間に対してそうですが、画面のサイズだったりモノに対してどれを選び、どれを使うかということを慎重に考えます。僕の作品は柔らかい感じなので、普通のキャンバス地だと厚みが強すぎたりして描かれた表層のものが合わないんです。それでそこに合う布を探してきたりとか、また逆に質感が荒いものを探してきてそれを使ったりとか。

おか：表面でいうと、荒すぎるけどドンゴロス（麻布）とキャンバス地の間みたいなんですね。そして画面上では分かりにくいですが、少し引っ掻いたような感じの表現がされていますが、これはなぜ？

藤本：もともとは布を2枚重ねで使うことをずっとやっていたんです。薄い布を1枚で使うと画面の奥が透けてしまうので、それをカバーしようと思って厚い布と薄い布を合わせて使っていたんです。それがきっかけで、合わせる前に1回上の布を切ってみたらどうなるんだろうと思って、やってみたら意外といい感じで、表情が枝に見えたんです。そこから始まっています。

おか：自分がそういう表現をしたかったのではなく、どちらかというと支持体から生まれてきたものということですか？

藤本：そうです。追求した結果それが生まれ出たという形になります。左側の方はフェンスのようなイメージで、切っているんですけど右側の方は彫っているんです。

おか：これは彫っているんですか？

藤本：はい。それは追求の形で出てきた表現というか表情というか。

おか：作品のサイズや展示する空間によって色々と変え

ていたりしているんですね。今回左の作品はすごく情報量が多い方だと思います。それから非常に情報量が少ない作品、シャシャッと描くような作品もあると思いますが、あのような作品はたくさん作品を作った中の一部みたいな感じですか？アーティストさんの中には、10枚ぐらい並べて作られる方とかもいらっしゃるみたいですが、そういうやり方とは異なりますか？

藤本：僕は1枚の絵に対して毎回集中して描いているので、副産物的にできるわけではないですね。

おか：今回の作品は展示場所をイメージしたものなのか、もともとある作品をここに持ってきたのかどちらなんですか？

藤本：小さい方の作品は後者の方でした。

おか：では床の間の作品は場所を見て作った？

藤本：はい。

おか：なるほど。これはもう以前からあるかのようでもんね。これはアトリエでお作りになったのですか？

藤本：そうです。

おか：現場に持ってきてピッタリはまった時の気持ちってどうですか？

藤本：めちゃくちゃ気持ちいいですね。アトリエは雰囲気がちょっと違うので。例えば天井高が違うのでアトリエだとちょっと詰まりすぎているかなって感じながらも、持ってきたらやっぱり正解だったなというようなこともあります。

おか：特にA-Labは一番奥に和室がありますし、日の入り方によって見え方が変わったりするじゃないですか。今日は晴れているからすぐ明るい形で見えるけど、それが曇った時とか夕方ぐらいになって日が陰ったりすると、また見え方が変わってくるじゃないですか。その辺は和室だったら独特ですもんね。

藤本：そうだだと思います。

おか：見ていてすごく楽しかったですし、これからどうなっていくのかなという感じもしました。作品の点数が少ないので、まだ展示できたんじゃないですか？

藤本：これはこれ以上やったら絶対ダメですね。

おか：絶対ダメ？

藤本：絶対ダメです。

おか：それはやっぱり空間自体と作品のバランスが壊れちゃうという？

藤本：はい。

おか：作品がまだあるのかなと思ったら、なかったのであれ？と思ったりしたんですけど、作品だけではなく、空間とのバランスのことも考えているところもあるんですね。みなさん遠目からの画では分かりにくいかと思いますけど、近くに寄って見ていただいたら本当に細かい仕事がよくわかります。これ「仕事」ですよね？



藤本：そうですね。

おか：本当に精神集中してやるような感じですね。

藤本：そうですね。それこそ先ほどの鈴木さんの作品の裏側の話じゃないんですけど、僕もそういうところに面白みを感じています。

おか：これってやってみないと、どうなるか分からないわけじゃないですか？

藤本：そうですね。

おか：これに関しては深く彫ったりしていますけど、また違う彫り方をしていけば、見え方が変わってきたりとかかもしれませんよね。それも作家としては楽しみというところですか？

藤本：そういうことです。

おか：ということは、一度頭の中で構造を描いてからこういうことをするんですか？

藤本：あまり考案ないです。いつも画面に任せてしまうんです。

おか：委ねるということ？

藤本：僕は画面を聞いているだけなので。求められることを。

おか：画面から求められることを聞いているだけ？

藤本：感覚としてですが。なのでモノによって結構変わります。

おか：面白かったです。ありがとうございました。

おか：続いて茂木山スワンさんです。

茂木山スワンさん（以下：茂木山）：よろしくお願いします。

おか：どちらの大学でしょうか？

茂木山：大阪芸術大学です。

おか：一言でいうとどんな大学ですか？

茂木山：変な人が高確率でいるというか、具体的にいうと頭にポケモンを乗せている人がいます。

おか：頭にポケモンを乗せている？

茂木山：言葉の通りポケモンを乗せている人が歩いています。



おか：この人は、ずっとこれをしているんですか？

茂木山：そうです。この場所をよく通っているんですよ。

おか：この人は学生さんですよね？聞いたことはあるんですか？

茂木山：学生で同じ年だと思います。友達が話しかけたそうですが、とても早口で何かを言っていたそうです。

おか：でもアーティストとか芸術家の方って、人と違うことをしなさいとかよく言いますけど、そういう意味でいうと1つのパフォーマンスですからね。通学時もこれしていたらすごいんですけど。

茂木山：そうですよね。貴き通して欲しいです。

おか：この空間が面白いですよね。次は何かありますか？

茂木山：これはスズメが亡くなっていて、それを埋葬するときの写真です。

おか：大阪芸大ってそんな儀式があるんですか？

茂木山：儀式を勝手にしました。アスファルトの上に落ちていたスズメを枝に乗せて。ちょっと素手で触ると申し訳ないと思って。



おか：大学には、生き物や鳥はよく来たりしますか？

茂木山：山の上にあるので四季折々の鳥はいます。

おか：スズメをそういう風に埋葬するのをあんまり見たことないので、なかなか珍しいですよね。

茂木山：そうですよね。

おか：埋葬は一人で行ったんですか？

茂木山：友達とです。写っているのは友達の手です。

おか：これはちゃんと埋めてあげた？

茂木山：埋めてあげました。

おか：それは今何か役に立っていますか？

茂木山：ないです。

おか：ないです（笑）。でもスズメを見たときに思い出したりとかしますからね。次はどんな写真でしょうか。

茂木山：これが埋葬完了の図です。お花も差してあげました。

おか：すごいなあ。これは大学内ですか？

茂木山：はい、大学の裏側にある山です。

おか：あのひっそりとしたところですよね。面白いですね、いきなりスズメが出てくるとは思いませんでした。

写真

おか：次のお写真は何かありますか？ フィルムですか？

茂木山：そうです。これは暗室でTypeCプリントをしている時です。

おか：学部は何学部？

茂木山：芸術学部の写真学科です。



おか：暗室はもともと真っ暗なんですね？

茂木山：そうです。カラープリントをする場合、光を一切残してはいけなくて蛍光灯を消した後も光が残るので完全に暗くなるまで待ちます。これはコンタクトシートを作っているときの図です。

おか：写真というのはこの工程があって、次何に行くんでしたっけ？

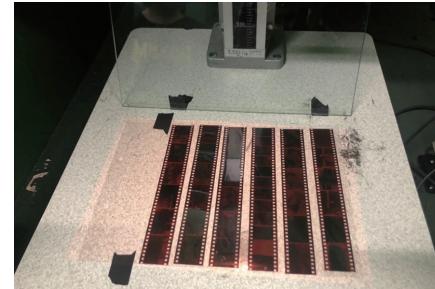
茂木山：印画紙に光を当てて、それから化学処理をして出します。

おか：やっぱり大学で勉強していくうちに写真の魅力に取り憑かれていったんですね？

茂木山：そうですね。私はスナップ撮影が好きで、道端に落ちている異様に感じたものとかをよく撮っちゃうんですけど、その場やその時間にしかない瞬間というか。

おか：瞬間を切り取るということですか？

茂木山：なんかあり当たりな言葉になっちゃうんですけど、そうです。



おか：写真をされる方は、小さい頃からカメラを持って写真撮影をしていたその延長線上にあるのか、何か表現したいから写真を選んだのかどっちになるんですか？

茂木山：私は延長線上ですね。

おか：ということは昔から写真は撮っていた？

茂木山：小学生の頃からデジカメで撮っていました。

おか：例えば遠足に行ったりどこか旅行に行ったりしたときに写真を撮ったりとか？

茂木山：そうですね。

おか：それは風景とかですか？

茂木山：風景もですが中学生になると友達もよく撮っていました。高校生になると「写真」を撮ろうと思いました。おかげで自分の撮り方とかは、写真を勉強していくとやっぱり全然違ってくると思うのですが、大きく違う点って何ですか？

茂木山：写真の教育というものを受けてから変わりましたね。シャッターを押してブレずに写っていればいいだけではないと。例えば過去の写真家、アンリ・カルティエ＝ブレッソンとかそういう名だたる写真家の写真を知ってから、それがベースになりました。

おか：今まで自分が好きなものを撮っていた？

茂木山：はい。

おか：でもそれがアンリ・カルティエ＝ブレッソンとか有名な写真家の作品を見て「こういう撮り方をしているんだ」というところから勉強って始まるんですか。

茂木山：そうです。感性を刺激されます。

おか：そこから次が技術ですか？

茂木山：習字の崩した文字のようなものを感じます。

おか：暗室で現像するとき、驚きはありますか？

茂木山：印画紙を感光したした後、化学処理ができる現像機に入れて待っていると紙が出てきて、像が出てきた！みたいな感じですね。

おか：自分が思った通りに現像できる時と、全く違う方向になってしまふ時もあるんですか？

茂木山：ありますね。カラープリントだとどれくらいの色が欲しいかとか数値の数メモリで結構写真の色味が変わってくるので、カラー写真って楽しいなと思います。

おか：今回の展示は少し薄暗い部屋の中で作品を展示されていますが、これはどういった作品になるんですか？

茂木山：今回はコラージュで制作して、長く丸い空間を自分の頭の中とつなげたような作品になっています。

おか：入口にシルバーのすだれみたいなものは何のイメージですか？

茂木山：何かしらを祝っているパーティー会場をイメージしました。

おか：ここからパーティーが始まるという感じですか？

茂木山：そんな感じです。できるだけチーにしたくて。高級ホテルで行われるパーティーではなく体育館で行うプロムやホームパーティーです。

おか：なるほど。最初は、何でこういう風にしているのかと思っていて分からなかったのですが、今お聞きして分かりました。コラージュされたこういう作品の表現で入口にシルバーのすだれがあることによって、遊び心といいますか、写真の作品ということだけじゃなくて、入口にチーなものがあることで一つの空間自体の見え方が変わりますよね。ここで展示してどうでしたか？

茂木山：階段付きの元倉庫が展示場所だったんですけど、一階と二階の空間を分断することができて良い場所でした。あの写真は私のゼミの先生と、わんちゃんをコラージュしたものです。お世話になったので、是非とも入口の特等席に。

おか：今回の展示をインスタグラムにあげている人が結構いらっしゃるんです。スワンさんの作品が一枚目にあつたりとか、すごく印象に残るんですね、遠隔で奥に作品があったり。だから今回のこの長細い部屋というのは正解だったような気がします。面白いです。

茂木山：嬉しいです。

おか：なかなか大学時代はこういった形の展示はできなかつたんですか？

茂木山：こんなに自由に使える壁はありませんでした。

おか：今回こういう新たな挑戦的な形の作品があつて良かったですね。この蛍光灯を下にやっているのもご自分でお考えになったんですか？

茂木山：はい、暗闇でぼんやりと光る色が欲しくて。イメージ的に青い蛍光灯が天国みたいな。

おか：画面上では分かりにくいんですけど、もっと実際は暗いんですよね。天国？

茂木山：青い天国です。

おか：青い天国？ということは反対もあるんですか？

茂木山：下が赤い蛍光灯だからといって地獄ではないんですけど、「クリスマスの鶏予約中」と書いて丸焼きのお肉がある下に優雅に泳いでいるダックが傍観しているという感じです。

おか：地獄ではないけどもダークな世界ですよね。ユートピアとディストピアみたいなイメージで。今まで写真でそういう表現ってされていないんですか？

茂木山：ないです。やって見たいです。

おか：表現が合っているか分かりませんが昔のB級映画を見ているような印象が頭の中に浮かんできて楽しめました。ありがとうございました。

おか：山下茜里さんお願いします。山下さんの作品は精華の時からずっと拝見させて頂いています。

山下茜里さん（以下：山下）：ありがとうございます。

おか：精華大学では何を学んでいたんでしょうか？

山下：テキスタイルコースで主に私は「蝶染め」という技法で作品を制作していました。

おか：どういった技法ですか？

山下：例えば白い布の上に蠟燭の蠟で丸を描いて、上から赤い染料で染めたらその丸く描いた所だけが白く残るという技法で、染まらない部分を削って作品を制作していきます。絵画とは逆ですね。描く部分を筆で描くわけではなくて、色が乗らない部分、1つ前の色を残す、みたいなのですずっと逆算して作品を作っています。

おか：それを院までずっと？

山下：そうですね。院までずっとやっていました。この写真は、精華大学のギャラリーフロールでの展示で、大学院1回生の時に作った作品ですね。

おか：これは何を表現しているんですか？



山下：大学院に入ってから主にこういう赤い人間のシリーズを作り始めています。各々のパネルの中に閉じこもっているようなイメージのものを5体展示して、その中に鑑賞者の方が入るという作品です。

おか：眼だけがチラッと開いていたりして独特ですね。

山下：そうですね。きっとおかさんに見て頂いたことのある作品は、眼だけの作品とかもっとカラフルなもののが多かったと思いますが、大学院に入ってからは赤いシリーズが多いです。

おか：何かきっかけがあったんですか？

山下：大学4回生で最後にいろいろな眼の作品をインスタレーションで大学に展示した後に、大学院に進む2年間で、もう少し違う表現が出来ないかなと思って、次は人体を取り入れてみようと考えました。

おか：一つの作品の流れとしてあると思いますが、表現の仕方が変わりましたね。

山下：線1本1本のストロークも、大学院に入ったら1個に変わってきた感じはします。

制作環境

山下：これは去年の4月あたりの個展の写真です。

おか：これは先ほどの作品の延長線上にある？

山下：そうです。延長線のもので、さっきのが大人なイメージなんですが、こっちはもうちょっと子どものイメージで作っています。71体この空間にあります。これが鑑賞者を囮うように展示しています。本来作品は人が見る側で、作品が見られる側だと思うのですが、逆転したものを作りたいというのがありました。

おか：鑑賞者が見られるという感じ？



山下：そうです。入った瞬間に見られている意識を鑑賞者はもつたのではないだろうかとか思いながら作ったものです。また、これがちょうど1回目の緊急事態宣言の時と同時に開催をしていました。大学が閉まるた決まりたのが搬入の1週間前で、その日の夕方頃に明日から閉まりますと言われ、大学に全部この71体がいたので急速下宿に71体全部トラックで運んで持ったという思い出があります。

おか：これ全部持って行ったら部屋が…

山下：この子達と一緒に1週間過ごしていましたね。

おか：ちなみに何畳ぐらいの部屋なんですか？

山下：10畳ぐらいのお部屋です。

おか：これ全部持って行らうとんど…

山下：そうですね。囮まれていました。見られながら生活していましたね。

おか：自分で制作して鑑賞者に見られるはずが自分が見られていた。

山下：そうですね。梱包する間も無かったので見られながら1週間生活していましたね。運び込む時もトラックから出してマンションの入り口に立て掛けました。その時は夜に1個1個エレベーターで運んでいてこんな人通るので、ごめんなさいって思ひながら。

おか：でも面白い経験でしたね。

山下：そうですね、良い経験だったと思います。去年の9月にも個展がありました。その時に初めて立体の作品を作りました。

これに至っては大学では作っていない、実家の4畳ぐらいの部屋でずっと制作していました。

おか：大きさはどのくらいあるんですか？



山下：最終的にこれは250×250×150(cm)ぐらいの立体です。眼の形をいっぱい染めて縫い合わせて、中に大きい風船を入れて膨らます形状にしています。最後は4畳の部屋では膨らませられないで、実家のリビングのみんなでご飯食べる所を端っこに寄ってもらつて、みんなでご飯を食べている真後ろにずっといました。

おか：ご家族はなんとおっしゃっていましたか？

山下：みんな温かく（笑）。

おか：なるほど。これはすごい作品ですね。続いては？

山下：大学院の1回生の時に展示した5体の作品の制作途中ですね。こういうところで私は制作をしていました。

おか：これは実際どういう作業をするんですか？

山下：これは染めているところですね。染める作業をしているんですけど木枠に布を張ったり、ポールとポールの間に布を張って染めていくようなところです。

おか：奥にあるのはかなり大きいですよね。

山下：そうですね。2m50cmの作品が2枚並べて張ることができるので、大学では広いスペースを使わせていました。下宿を引き払って、今は8畳くらいの部屋で作品を制作していますが、大学院の修了制作に出した作品も8畳の部屋で作っています。

おか：今ちょうど後ろにドーンと眼がありますけど、めちゃくちゃでかいですからね。

山下：これも大学が閉まっていたので、4畳の部屋では作れないから8畳の部屋で2m×2mの布を1枚ずつ染めて縫い合わせました。布の良いところは、縫い合わせができるので、縫い合わせて9m50cmくらいの作品を作りました。

おか：何回縫い合わせているんですか？



■ アーティスト・トーク

山下：4回縫い合わせて5枚で1つの作品になっています。私がこの作品を引きで観ることができたのも修了制作展の時が最初で最後でした。

おか：なるほど。ずっと「眼」ですよね。どうしてそこまで眼に執着するのかなと気になります。

山下：人の目に映り込むという現象にずっと興味がありました。今私がおかさんと喋っている時、私の目にはおかさんが映っていて、おかさんの目には私が映っているんですけど、他の体の部位のどこでもそういうことは絶対に起きなくて。

おか：映り込むということは起きないです。

山下：王道のモチーフだけ突き詰め続けたら自分のものになっていくのかなというのもあってずっと眼の作品を作っていますね。

おか：一目で見て山下さんの作品というのはわかりますからね。これもすごいですね。

山下：これまでカラフルなものだったり、赤いものが多くたんですけど、最後に何をやっていなかったかなと思ったらモノクロの作品は作っていないなと思って。初めはやっていないことをやりたいというところから始まったんですけど、さすがにそれだけの理由で大きいものを作るモチベーションをどうしていこうと思って。色のある眼が人を映す眼だとしたら色のない眼は人を映さない眼として作ろうと。なので人が映らないということをどう表現したらいいだと思った時に、鏡は割れると乱反射で目の前のものを映さなくなることに着目して、眼自体を割る、割れているような表現になりました。

おか：これは制作している途中からそういうものが生まれてきたんですか？

山下：そうですね。作りながらどういうポジションの作品、シリーズにしていくかなと考えながら作っていくという感じです。

おか：これまで1つ違う作品が生まれたということですね。

山下：そうですね。これまで次に割れた眼のシリーズを作っていてらいいなと思っています。

おか：またこれからも楽しみにしたいと思います。山下酉里さんでした。ありがとうございました。

おか：今回もう一人鐵羅佑さんがおられるのですが、お休みのため代わりに作品をご説明されている映像があります。

(インタビュー映像から抜粋)

・自己紹介

鐵羅佑です。これまで金属彫刻を中心に制作してきました。溶接痕に魅力を感じて作品の中に取り入れるようになります、重量感のある作品制作を主にやってています。

・A-Lab Artist Gateに参加することについて

こういう展覧会は初めてなので他の作家さんと一緒に設営しながら学べたらと思いつつ、これを足がかりにこれからどんどん展覧会をやっていきたいと思います。

・今回の作品について

大学の卒業制作で制作した、およそ全長10mのサンショウウオから足を切り取って、建造物をイメージしたものに再構築をしたものです。扱ったテーマはコロナウィルスでの生活や、芸術を表現する場所の問題点です。その時の問題はずっと今もズルズルと引き継がれていて、それがもっと日常に潜んでいるのを表現したくて、ちょっと不気味な形を目指して作りました。

・今後の活動

公募にも出していきたいです。大きい作品を作りたくて、鉄という素材を扱っているので、野外彫刻にも挑戦していきたいと思っています。



おか：先程ちらっと出たりしましたが大学時代にはターニングポイントというものが必ずあります。ターニングポイントをお聞きしまして作品の意図であるとか、どういう変化をもたらしたのかということをお聞きしてみたいと思います。それでは河原さんからお願ひいたします。



河原：青い城の映画がターニングポイントになっているので、その作り始めた元になっているポーランドです。

おか：何か出来事や感じたことで思い出すことはありますか？

河原：そうですね。チェコも影響が大きいです。人形劇が大好きで、ポーランドに留学していた間にチェコにもたくさん行って人形劇の鑑賞に行きました。切り絵もすごく好きで、命のないものが動き出してそれが魔法みたいに感じるような感動があります。

おか：人形劇ってすごいですもんね。僕らが小学生の時に見た人形劇とは違って、今は人の半分くらいの大きさのものを操ったりしますよね。

河原：そうですね。大きいものもあつたりしますね。

おか：10mくらいの大きなものもありますよね。そういうものもご覧になられましたか？

河原：大きいものはいつか見たいと思っているんですけど、小さいものとか伝統的なものとか昔のものとかずっと続いているので、そこを実際に見に行けたことが一番良かったかなって思いますね。

おか：それは人形劇の世界観ですか？ちょうど今展示されているインスタレーションなんかでも非常にファンタジー的なところもありますし、人形劇ってそういうところもありますもんね。土台にしているのはそういうものだつたりするからね。

河原：ファンタジー的なところもすごく好きなんですが、怖とか切なさをすごく大事にしている。楽しい場面なのに悲しい音楽が流れているとか、そういうものに心動かされるので自分の作品もそういったものを大事

にしています。

おか：世界観的にいえば、人形劇から映像アニメーション的な部分って繋がっていますよね。

河原：やり方としては人形劇と同じような感じですね。

おか：展示の中では建物の書き割りをつくったりしていますが、そのまま人形劇に出てきそうな雰囲気もします。チェコで見た人形劇がインプットされていて、それが表現につながっている部分もあるんですか？

河原：そうですね。ずっと憧れていたので、特にポーランドは大学が交換留学をしていたというのが理由ですけど、チェコもずっと憧れていたので、実際にその場所に住めたことが一番大きかったなと思います。

おか：チェコは一度行ったらもう1回行きたいってみなさん言いますよ。

河原：歴史的にすごく魅力がありますね。やっぱり黒いところがあるので…

おか：そういう部分をこれからも引き出して作品表現をしたいというところがあるんですか？

河原：過去の作品を出し忘れていましたが、チェコのおとぎ話から着想を得て自分の物語にした映像を作ったりもしています。その中でずっと海の向こうの国のことを見ていたので、帰ってきてからは日本の方を見つめていて。新作は日本を舞台というか、日本の自分が気になる所を映画の中で考えていくのかなと思います。

おか：海の向こうという表現がいいですね。すごくおとぎ話的な言葉の表現だなと思いました。ありがとうございました。



おか：統一では鈴木大晴さんよろしくお願いします。ターニングポイントは一体何でしょうか？

鈴木：下宿です。

おか：下宿がターニングポイント？ 実家というか家は？

鈴木：実家も大学も京都で、通える距離ではあったんですが、大学2年から下宿することにしました。

おか：何か理由があるんですか？

鈴木：みんなで暮らしているので、夜中にガザゴソすることが出来なくて。一人で夜中に音楽を聞いたりしたかったので、どうしても住みたくて。授業が忙しいことを親に言ってみたら下宿できることになりました。

おか：やっぱり変わりましたか？

鈴木：一人で全部やるようになったことと、圧倒的に人と会話する時間が減りました。考える時間が増えてからすごい作品もグッと良くなりました。

おか：どんな部屋だったんですか？

鈴木：普通のアパートの6畳でした。

おか：大学で制作してきたものだと6畳ではかなり狭くないですか？

鈴木：そうですね。今は違うところに住んでいますが、4年からは大学に入れない時期があったので、織機をいただいて6畳の部屋に置いていました。布団を敷く場所がなくて、毎日織機の下に布団を敷いて寝ていました。

おか：ものすごい窮屈じゃないですか？

鈴木：頭の上に作りかけの作品がずっとある状態でした。

おか：でもそれがやっぱり楽しかったんですね。ある意味作品とじっくり向き合えるというか。

鈴木：そうですね。

おか：面白いですね。そういう学生さんがいるというのは僕も嬉しい限りですよ。ありがとうございました。

覚悟



藤本純輝さん

おか：続いて藤本純輝さんお願いします。藤本さんのターニングポイントを教えてください。

藤本：「武装解除」です。

おか：何があったんですか？

藤本：今の作品になるまでは、一言で言えばありきたりな作品を作っていたと思います。どこかで見たことがあるようなものがかったいなと思、誰かの作品っぽいものとか、ゴツゴツとしていたり激しかったりとか全く今の作品とは違うことをしていました。そんな時に、作家としてどうなりたいかと考えたら、自分にしかできないものを作っていくかというのがありました。そのためには今まで憧れで作っていた部分を全部捨てなきゃいけないなと思い、かっこついている部分を全部捨てました。ほんとに自分のものしかないように状態まで落とし込んでいった、それが武装解除かなと思っています。

おか：なるほど。それから支持体と向き合うようになったということですか？

藤本：そうなってきましたね。僕自身、性格というか人が多分丁寧な人だと思うんです。それなら丁寧な表現をしなくちゃダメだろう、と思いました。そこからずっと支持体に向かってとか作品の作り方も丁寧にとか、絵の具の置く場所、配置だったり空間に関してもすごく丁寧に行うようになって、今の感じになりました。

おか：この武装解除は何回生の時ですか？

藤本：これが学部から院に上がる時ぐらいですね。

おか：ということは大学時代と院の作品というのはちょっとイメージが違う感じですか？

藤本：そうです。多分テーマとして気になっているところは一緒なんですけど、ただもう表層の見え方は全く違いますね。

おか：例えば僕なんか過去の漫才の自分のVTRを見たらちょっと恥ずかしいような気持ちになるんですが、過去の自分の作品を見てどういう気持ちですか？

藤本：基本的にはどれも好きなんです。これはこれでいいなと思うけど、プロとしてやっていくにはこれじゃちょっとただの趣味みたいだなという。

おか：真似事みたいなところがあるっていう、形のものがあるというね。自分の展覧会をやった時なんかにそ



茂木山スワンさん

いう作品もあったらこうやって変わっていったなあっていうような所もこれから先なんかあたら見え方にそういうのも面白いかもしれませんね。過去の作品もまたよかったです見せてください。ありがとうございました。

創造

おか：さあ続いて行きましょう。茂木山スワンさんお願いします。ターニングポイントは一体何でしょうか？

茂木山：ガイアです。

おか：ガイア？

茂木山：ギリシャ神話に出てくる大地の神ですね。

おか：ギリシャ神話？ これはどうしてですか？

茂木山：ガイアは混沌（カオス）から生まれてガイアからこの世のいろんなものが生まれてきたんです。

おか：そういうところから天国とかそういうイメージがあつたりとか、ディストピアとユートピアじゃないけどそういう世界観のきっかけですか？

茂木山：そうですね。混沌な作品を作りたくて。情報量が多いのが好きなんですよ。

おか：例えば壁画とかいっぱい情報量があるじゃないですか。情報量の多いものを写真の中に取り込んで、一旦自分で整理して、インスタレーション的な作品になるということですね。だからそれが1枚の作品としてではなく、展示した時にガイアというターニングポイント的な部分が表現に出てきたという。何回生の頃ですか？

茂木山：3回生ぐらいにギリシャ神話の図鑑みたいな本を読んだんです。

おか：それを見て感動したということですか？

茂木山：ウケるって思いましたね。

おか：ウケる！？ ギリシャ神話ウケますか？

茂木山：はい。

おか：ウケるというのは面白い、滑稽な面白さとかそういう意味ですよね。ギリシャ神話の捉え方も面白いですね。色々な神々がいるじゃないですか。そういうのを見ていてやっぱり楽しかったですか？

茂木山：楽しいですね。

おか：作家さんから出てくるイメージが、ストレートに伝わってきます。ありがとうございます。

出会い

おか：続いては山下茜里さんお願いします。ターニングポイントは何でしょうか？

山下：「どこかのワークショップ」です。

おか：どこかのワークショップ？

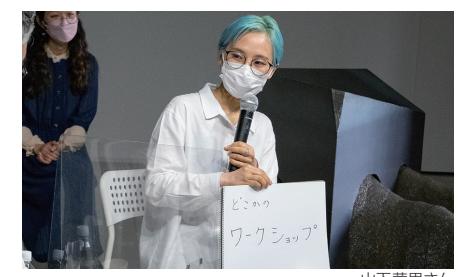
山下：おそらくどこかの大学のオープンキャンパスで受けたワークショップだったと思うんですけど、制作でずっと使っている道具をその時に初めて使ったんです。

おか：高校生の時？

山下：そうです。高校生の時に受験のために行った大学でその道具を使ってワークショップを受けたんです。

おか：その頃からテキスタイルを専攻しようと思っていたわけですね。そういう道具は見たことがなかった？

山下：全然見たことがなくて、その道具を使って蠟染めの簡単なワークショップを受けたんです。それから大学に入って、2回生の最後の課題が自由課題だったんです。その時に何をしようかな、どんな技法を使おうかなという時に、そのワークショップで使った道具が面白いなと思って。ただ大学ではその道具を使った授業をしていないんですよ。だから先生に相談して、その道具を1個買つ



山下茜里さん

て使い始めたものを今もずっと使っています。

おか：1、2回生のその時は使おうとは思わなかつたんですか？

山下：1回生と2回生の間は、色々な技法を学ぶ技法研究の期間として決まっていたんですね。織の時間、染の時間、縫の時間というものが決まっていて。2回生の最後の授業で今まで学んできたものの中でどれがしたい？って言われた時に、結局今まで学んで来なかつたことをしたいと思ったんですね。

おか：先生にしてみたらそこ！？っていうところもあったでしょうね。

山下：そうですね。でも蟻の先生も、じゃあこの道具だったらこういう使い方ができるんじゃない？って親身に考えて下さって。そこから今の作品に繋がっています。

おか：ありがとうございました。みなさんそれぞれターニングポイントがあり、作品の方向性が決まつたりとか、道具を持つことによってまた新しいものが生まれてきたりがあるんですね。最初は大学や作品を見て頂いて、ターニングポイント、こういった形で大学時代に作品の方向性が決まつてくるという話を聞きました。

おか：最後は、アーティストの皆さんにアトリエにあるものを持ってきて頂いてあります。それによってアーティストさんが一体どういった方なんだろうということを掘り下げていきたいと思います。それでは河原雪花さんお願いします。何でしょうか？

制作風景

河原：これは切り絵の人形のパーツです。人形を作るんですが、分けて描いて、切ってパーツにして、ファイリングして、写真を撮るときに組み合わせて使います。

おか：展示している映像になっていたものですか？

河原：そうです。これは最初のデザインで、主人公の女の子の一人ですけど、服がめんどくさすぎてやめました。

おか：笑。やめた？

河原：はい。全部360度描かないといけないから、ちょっとめんどくさいなと思ってニットにしました。

おか：やっぱり制作してから気がつくことがあるんですね。これは足元ですか？



河原：これは靴下ですね。

おか：たくさんありますね靴下。それから？

河原：これは靴です。

おか：すごいですね！これは靴の裏じゃないですか。

河原：そうですね。歩くシーンとかは靴の裏も作らないといけないので。

おか：靴の色々な角度ですよね。表面や横、ちょっと斜めだったりとか、そのシーンによって靴が違うから？

河原：そうなんです。

おか：これだけ作っているんですね。

河原：はい。いっぱい作らないといけないので。

おか：全部自分で描いて切っているんですよね？

河原：そうです。

おか：すごい！背景とかもあるってことですか？

河原：そうです。背景も全部あります。

おか：これがアトリエに何冊ぐらいあるんですか？

河原：これは10冊ぐらいあると思います。

おか：その中から選んでいってやっていく、チョイスしていくって衣装部屋と言うか……。これが無かつたらできないですね。

河原：そうですね。トレーシングペーパー買ってきて、自分で本みたいにして。

おか：これを見てイメージする場合もあるんですね？

河原：絵コンテが全部決まっているのでそれを元にして。

おか：絵コンテもたくさんあるんじゃないですか？

河原：何回も変わりますね。もともと絵コンテも20枚くらいとかだったんですけど、作りながらどんどんお話の内容が変わっていくので、書き直しながら。

おか：これは現場の制作風景というか、こうやって制作

しているんだっていうのがわかりますね。勉強になりました。ありがとうございました。

色の表現

おか：鈴木大晴さんお願いします。一体何をお持ち頂いたんでしょうか？

鈴木：僕は糸を巻く木の棒です。織の時に、絶対に必要になるものです。

おか：どういう使い方をするんですか？

鈴木：決めた糸を巻きつけて、これを織る前に30個近く作っておきます。

おか：これを先に作っておくんですか？

鈴木：そうですね。下図に合わせた色とかその時に選んだ色の糸を、これだと4本ですが、大体5本ぐらい入っちゃうとちょっと織の地の部分、面の部分がおかしくなっちゃうので最大で4本ぐらい使います。

おか：それで色を表現するということですか？

鈴木：例えば黄色だとしたら、大体下図の段階で黄色と決めていたらその黄色に近い糸を集めて、何種類も作ってそこで織り込んでいくという形です。

おか：例えばこの糸によってもので表現するとしたらどういうものですか？

鈴木：光とか。

おか：光？

鈴木：背景に当たる部分とか。

おか：なるほど。この糸の織り込みが光になるんですか。

鈴木：そうなんです。

おか：絵の具とはまたちょっと違う、混ざるというか…

鈴木：そうですね。絵の具よりは色が残ります。

おか：色が1色じゃないから独特のカラーリングになっていくというのはテキスタイルの一つの魅力なのかなと思います。

鈴木：織にしかこれは多分出せない色であって、そういう表装とかであるかなと僕は思っています。

おか：展示している大作があるじゃないですか。あれだとものすごい数いるんじゃないですか？

鈴木：そうです。もうすごい数ですね。

おか：100本ぐらい？

鈴木：100本では足りないぐらいですね。すごい面積が大きいので、あの作品でいうと、左端の部分が最初に全部ピンクで決めているんですよ。でも近づいてみると全くピンクじゃない色も入っていて、という感じであそこだけ多分100色ぐらいは使っていると思います。

おか：僕ら遠目から見たら2色ですもんね、赤と白っていう。それが100色使っている？

鈴木：それぐらいは使っていると思います。何百パターンって感じですかね。例えば4本黄緑が3本で、オレンジが1本としても全く違う見え方になるので、このバランスとか、濃い黄緑と薄い黄緑というのもあるし、それも自分で糸を全部染めて作ります。

おか：染から入らないといけないんだ自分で。自分の好きな色を。

鈴木：市販の糸だとパターンが決まっているので。

おか：大変ですね。

鈴木：準備だけで1ヶ月とか取られたりは全然します。

おか：へえー。ちょっとびっくりしました。ありがとうございます。テキスタイルの深さがよく分かりました。

丁寧さ

おか：藤本純輝さんお願いします。植木ですか？想像を超えるものを持ってきますね。しかも下には鯖缶が。

藤本：アトリエにずっと置いているんですけど、今日持ってくるにあたって鯖缶を取ろうと思ったら下から根っこが出ていてこの状態でした笑。

おか：これはアトリエにずっとあるんですか？

藤本：置いていますね。

おか：これのすごく伸びているじゃないですか。

藤本：伸ばしっぱなし、生やしちゃなしで任せています。

おか：置いてどのくらい経つですか？

藤本：2年くらいは経っていますね。ちょうどターニングポイントの時にあった学部と院の変わり目で、自分の丁寧さみたいなことを考えていた時に育て始めました。

おか：最初は作品のモチーフとして？

藤本：いえ。モチーフでは全くなくて、気持ちの問題なんです。植物を育てる気持ちの丁寧さが作品に出てきたらしいなという部分だったんです。



おか：育てる丁寧さが作品に出てくる？

藤本：はい。なので毎日見ないと水の状態も分からなくし、その伸び方とかそれを全部ここに詰まっていることが全部作品に出てきていて。

おか：これはなくてはならないもの？

藤本：そうですね。ものに対しても切って形を整えたりとかってあるかもしれないんですけど、そこはもう僕は作品と一緒に、伸ばしっぱなし、生やしっぱなしで全て全部この状態がいいなっていう風に思っています。

おか：それが鯖缶の根っこのことまでいっちゃったっていうことなんですか？

藤本：それもめちゃくちゃ面白いなと思いましたね。

おか：なんで下に鯖缶を置いたんですか？

藤本：単純に下に受け皿がいるじゃないですか。それで鯖缶を、ちょうどすっぽりはまるんですよ。

おか：これが作品に向き合う一つのアイテムになっているというのはすごく意外というか。

藤本：よく見てみると分かるかもしれないんですけど、やっぱり葉っぱの色も違うじゃないですか、影になってる部分、光の部分とか。その乱雑さとか一つの丸っぽいものが集まって植物に見えるのは今やっている仕事の絵の具が集まって一つの光景に見えたりとか、色が微妙に違っていたりとかっていうところが繋がっています。

おか：ありがとうございました。色々なものが出てきて面白いですね。

カメラ

おか：続いては茂木山スワンさんにお願いしたいと思います。アトリエにあるものは一体なんでしょうか？

茂木山：カメラです。

おか：これは制作に使うものなんですか？

茂木山：制作に使うカメラです。コンパクトフィルムカメラといって、すごく小さくて機動力が高いんですね。

おか：機動力が高い？

茂木山：機動力の高いカメラを選んで使って、ボタン押すだけで撮れます。

おか：これはあれですか？初心者向きというか、僕らでも使えそうなやつですか？

茂木山：はい、誰でも使えちゃいます。

おか：へーー。

茂木山：最初はいわゆるカメラマンみたいなデジタルカメラを使っていたんですけど、それは重くて日常的に持ち歩くことができなかつたんです。それでだんだんカメラが小さくなって、最終形態はこれになりました。

おか：やっぱりフィルムは面白いですか？

茂木山：面白いですね。

おか：独特のフィルムの質感というか写真のそういう面白さっていうものを……

茂木山：それもありますし、手作業なので物質感を感じられるっていうんですかね。デジタルカメラはカメラが撮って、パソコンに移してという感じですけど。

おか：フィルムは手間がかかりますよね。色ももちろん自分の思い通りにならない時もあったりとか、そういうところの生き物的な面白さというのもあるのかも。これは何年ぐらい使っているんですか？

茂木山：これが2年くらいですね。2年前からフィルムを始めたので。

おか：2年前からフィルムを始めて今ちょうど楽しんでいる最中という感じですか？

茂木山：楽しんでいる最中です。

おか：制作はそれが一番ですよね。思った以上に軽いですね。細かく使い込んでいる感じもあったり。この黄色のフィルムを見ると、小学校の頃とかそういう時代に

使っていたカメラを思い出します。これからもフィルムで写真作品を作ってください。ありがとうございました。

チャンチン

おか：最後は山下茜里さんお願いします。

山下：これがさっき言っていた道具ですね。この先っぽから熱い蟻が出てきて、こういう線を1本1本。

おか：中は何か入るような？

山下：そうですね。中に脱脂綿とかコットンとかを入れてから蟻がグツグツ沸いているお鍋にすくって、そうすると先っぽから蟻がジャーと出てくるんですよ。ペンで描くような感じで蟻を置いていくんですけど、見ていただいたら分かるようにストップーとか何も無いです。

おか：無いですよね。出っ放しですよね。

山下：入っている蟻を出しきるまでは、腕をノンストップで動かし続けないといけない。かなり早いスピードで出てくるので、蟻が切れたなと思う瞬間に、また蟻の鍋に入れて蟻をすくうという工程を何回も繰り返します。

おか：これは授業では使っていなかったということでしたが、また別の道具を使っていたということですか？

山下：蟻染めでは蟻筆という丈夫な筆があるんですけど、筆に蟻を付けて、布の上に置いて染めるというのが大学でも教えてもらえるものなんです。これはタイとかインドネシアとかで使われていて、更紗の小さい柄が描かれているようなものや大判のスカーフを作る時の道具なんですよ。

おか：日本のものでは無いですか？

山下：これは日本で唯一売っているのをずっと使用しています。



おか：大学で使っていたものより、この道具の方が自分にはしっくりきたということですね。

山下：しっくりきましたね。それも囲って中に色を染めてという細かい作業をするのではなくて、ドローイング的なストロークで大きく激しい動作で作ることができるところですね。

おか：筆とはまた違うということですね？

山下：そうですね。筆だとどうしても、これだけ早いストロークで何かを描いたらかすれてしまうじゃないですか。これはかすれないんですよね。

おか：作品いうと眼の血液の部分とか？

山下：そうですね。なので血管とか血液が流れるエネルギーがバーンって早く体を巡っていくようなイメージで、蟻を置くようなことをしています。

おか：話をしている様子がものすごく嬉しそうですね。やっぱり楽しいんですね。今ちょうど眼の部分が映っています。こういう部分ですか？

山下：もう全部そうですね。線を置いて染めてを、何回も何回も繰り返して陰影をつけたりしていますね。

おか：筆だと思っていました。聞いてみないとわからないですね。これで2年、3年と使っている？

山下：これはそうですね。2~3年ぐらい使っているんですけど、家に何本もったり、現地のものを先生から頂いたりっていうので、太さがちょっと違ったりとか。

おか：それでまた線が変わりますもんね。

山下：そうです。

おか：なんか鳥のクチバシみたいで可愛らしいですよね、見た目が。これは何か呼び方があるんですか？

山下：「チャンチン」って言います。

おか：チャンチン？それはインドネシアの言葉？

山下：そうです。チャンピンとかチャンチンとか言います。

おか：貴重な道具をありがとうございました。ということで、みなさんにお話しをお伺いしました。ありがとうございました。